

(口絵解説)

花の病害虫 (19) —— ガーベラ ——

ガーベラ属は、アフリカ、アジアに約 40 種が分布している。今日栽培されているガーベラ (*Gerbera Jamesonii* *hybrida* Hort.) は、南アフリカに分布する 2 種の野性ガーベラの交雑により生まれた雑種を起源としている。これらの原産地の気象条件からみて、温暖で乾燥した気候が栽培適地といえる。

我が国への導入は明治末期と古い。施設栽培による高品質生産には、実生系品種から栄養繁殖系品種に変わる必要があり、現在のような栽培が本格化したのは昭和 50 年代からである。スプレー系の切り花が主流の現在の消費動向からみて、長い花柄の先に大きな花を一つ付けるガーベラは、異色の存在である。それは太陽を連想させる花型や豊富で明るい花色が消費を促すためと思われる。

ガーベラの栽培面での新しい動きとしては、小輪系品種の登場、増産と、ロックウール栽培の増加である。小輪系は従来の大輪系の花茎が 10~12 cm に対し 6~8 cm と花径は小さいが、水揚げ、花持ちが優れていること、アレンジメントなどに使いやすく用途が広いこと、生産面では豊産性であることなどの理由で大幅に増加した。

ロックウール栽培は土壤病害回避や収量、切り花品質が土耕より優ることも可能なことから、オランダでは栽培面積の 44% に達し、栽培の主流になろうとしている。

病害ではモザイク病、斑点細菌病、根腐病、灰色かび病、斑点病、菌核病、白絹病、うどんこ病、半身萎ちょう病、虫害ではスリップス類、ハダニ類、アブラムシ類、コナジラミ類、マメハモグリバエ、シロイチモジヨトウ等が発生する。これらの中で、*Phytophthora* 菌による根腐病の発生は産地の存続にかかわる最も重要な問題である。

1 根腐病

発生は年間みられるが、多発時期は夏~秋である。初め外葉から生色を失いしおれてくる。やがて全葉がしおれ、病勢が進むと褐色に枯れ上がり、株は枯死する。根の症状は軽症株では、根系の一部に軟化腐敗部分がみられるが、重症株は根系全体が黒褐色に腐敗する。圃場での発生は数株が坪状になったり、畝に沿って連続している場合がある。

ガーベラでの発生は苗からの持ち込みと土壤伝染による場合がある。汚染苗の場合は定植まもないころから発病し、土壤汚染の場合は、通常、土壤消毒してから栽培されるため発病は遅くなる。

土壤消毒については臭化メチルで慣行的に行われているが、防除効果は高くない。ダブメット剤あるいはクロロピクリンによる土壤消毒とリドミル粒剤の株元施用の併用が有効である。ロックウール栽培は病原菌の進入には防御的な側面があり、無病の苗や用水を用いることで発病が抑制されている。

2 斑点細菌病

Pseudomonas cichorii による細菌病で、葉での発生は葉縁部では黒褐色の斑点を生じ、進展すると葉身部へ V 字型や不整形の病斑を生じる。葉身部では不整形の円形病斑や葉脈に区切られた多角形の病斑を生じ、進展すると病斑が融合して大型の黒褐色の不整形病斑となる。

本病は露地でも、冬期の施設栽培でも発生する。ハウス内の発生場所は内張りビニールがたわみ、中央部の結露した水滴が落下して濡れた部分に集中しており、湿度環境が発生を助長している。発病適温は 20~25℃ である。

防除対策は発生が葉面の濡れに起因していることから、薬剤防除より耕種的な防除対策を講じる必要がある。

3 半身萎ちょう病

Verticillium dahliae による土壤病害で、初め下葉が紫黄色になり萎ちょうして、激しい場合は枯死する。葉の半分が黄化している場合もみられる。根冠部、根及び葉柄を切断するといずれも導管部が褐変している。

4 菌核病

Sclerotinia sclerotiorum による病害で灰色かび病とともに好湿性病害で冬~春期にかけて多湿条件下で発生する。症状は株際の葉柄や花梗から発病し、下葉、花梗がしおれてくる。被害部には白色の菌糸を生じ、やがてネズミの糞状の不整形の黒色菌核を生じる。

伝染源は菌核で、菌核は発芽して子のう盤を形成し、多数の子のうをつくる。子のう盤の形成は 14~20℃、多湿状態が良好である。薬剤防除は灰色かび病との同時防除が可能で、通常の管理で多発することは少ない。

5 灰色かび病

Botrytis cinerea による病害で、花卉に褐色斑点を生じるので問題となる。そのほか、二次的に菌核病の跡や枯死部分に感染したりする。伝染源は豊富で、多湿状態が続くと発生しやすくなる。防除対策としては、地際の子葉かきや枯死葉を除去し、通風をよくする。薬剤散布は株元にも十分かかるように行う。

6 モザイク病

栽培の主体がメリクロン苗による施設栽培のため、特に問題となることはないが、株分け栽培で CMV により葉のモザイク、花卉の脱色、奇形を生じる場合がある。

(和歌山県果樹園芸試験場 家村浩海)